書評

謝建明著『ミューズの抵抗——芸術における抵抗精神』

楠井清文

一九九〇年代に入って〈台湾文学〉研究は著しい展開を見せた。日本でもほぼ年毎に研究書が刊行され、本格的な文学史的評価が行なわれつつある。これと並行して従来入手困難だった作品の紹介も進んだ。中でも緑蔭書房から刊行中の河原功・下村作次郎・中島利郎編〈日本統治期台湾文学〉の翻刻は、『日本統治期台湾文学　日本人作家作品集』（一九九八）『同　台湾人作家作品集』（一九九九）『日本統治期台湾文学文芸評論集』（二〇〇一）『日本統治期台湾文学集成』（二〇〇三）と網羅的な勢いで次々と出版されている。

このような〈台湾文学〉研究隆盛の要因の一つとして、台湾自体の政治状況の近年における推移が寄与していることは紛れもない事実である。河原功氏は『台湾人作家作品集』の「まえがき」で、「台湾文学の研究は戒厳令解除後の九〇年代に入って大きな進展をみた」と述べる。一九四九年から八七年までの約三八年間に渡る戒厳令の施行は、それ以前に行なわれた半世紀に及ぶ植民地支配の歴史に直面する契機を、戦後、支配者／被支配者双方から奪ったという点でも大きな禍根となった。岡崎郁子氏は「台湾文学のなかの昭和という時代」（『昭和文学研究』第25集　一九九二・九）で、「長い間政治の干渉を受けつつ発展してきた台湾文学が、ようやく大きな転機を迎えているように思う」と述べ、戒厳令解除後の変化は特に著しく、日拠時代作家の日文の作品を、中国語に翻訳して再評価したり、『二二八台湾小説選』を、若手作家の林雙不が編集して、タブーに挑戦したり、大学で台湾文学が講じられたり（大学の中国文学科では、つい最近まで、中国四千年の古典文学、文字学、音韻学などが中心であった）するようになってきた。

と台湾での変化を伝える。台湾・日本・中国で〈台湾文学〉は、今漸く〈文学〉として読まれ始めたと言えるだろう。同時に従来の日本文学研究において、多くの場合日本語で書かれたこれらのテクストを位置づけて来なかった過去が、改めて問い直されているのである。それは支配関係の亀裂が双方に齎した〈傷痕〉に分け入ることなく、日本語の通用する身近な異国・台湾のイメージ

だけが繰り返し語られる構造ともパラレルである。

一九二〇年代から始まる台湾近代文学の展開を考える時、植民地支配下における「国語」（日本語）教育の影響を無視することは出来ない。本書の著者はその歴史的展開が辿った複雑性を次のように指摘する。

つまり、台湾近代文学は二つの「国語」を以って展開していたのである。台湾新文学には、頼和、陳虚谷、楊守愚、蔡愁洞、朱点人、王詩琅、張我軍を中心とする白話文学の流れ（楊雲萍は白話文と日本語に切り換える例外的な存在である）と同時に楊逵、呉濁流、張文環、巫永福、王昶雄、呂赫若、龍瑛宗などの日文作家をはじめとする日本語による創作活動の流れも存在している。この両者の発展過程と相互関係に注意しなければ、台湾新文学の全体をはっきり把握できない。

（序章「課題と方法」第2節）

本書はこの複雑な過程を、頼和（ライホー）（らいわ　一八九四～一九四三）、楊逵（ヤンクイ）（ようき　一九〇五～八五）、張文環（チャンウェンホワン）（ちょうぶんかん　一九〇九～七八）という三人の台湾人作家の活動を中心に論じている。まず全体の構成を見ることで、著者の基本的観点が明らかになるだろう。序章「課題と方法」、第1章「日本在台統治及び台湾の植民地支配への抵抗」、第2章「台湾新文学発生の背景と新旧文学論争」、第3章「特徴一：血涙の文学――頼和の文学活動を中心にして」、第4章「警察政治への批判――頼和の「秤」を例にして」、第5章「特徴二：傷痕の文学――楊逵の文学活動を中心にして」、第6章「経済搾取への批判――「新聞配達夫」とその周辺――」、第7章「特徴三：哀傷の文学――張文環の文学活動を中心にして」、第8章「文化抑圧への批判――張文環の「夜猿」を例にして」、終章「総括と展望」。以下各章の内容に触れたい。

第1章、第2章では台湾新文学運動発生に至る、日本統治への抵抗運動の推移が辿られる。一八九五年領台以後の台湾征服戦争は、日清戦争と同程度の戦死者を出した程、苛烈な武装抵抗を受けた。しかしこの抵抗も二〇年代以降、台湾社会内部の改革運動や地位向上運動が主流となる。新文学運動は台湾議会設置請願運動や台湾文化協会などと連関を保ちながら、社会化・大衆化された文体・言語の創出という目標を掲げた。具体的には平俗な白話文学の提唱であり、著者は中国における「文学革命」（一九一七年～）との共通性を指摘する（第2章第1節）。しかし中国の場合と異なり「文言文と中国白話文、中国白話文と台湾話文、中国文と日本語」（同第3節「文学言語における複雑的様相」）という複数言語の並存・葛藤の中で、新文学は複雑な進展を見せた。

第3章では白話文学運動の代表作家であり「台湾新文学の父」と称された頼和の文学を論じる。大道芸人の子として窮迫した幼年期を送った彼は台北医学校卒業後、中国に渡り五四運動の空気に触れた。その後彰化で開業医の仕事の傍ら、『台湾民報』『台湾新民報』等に作品を発表する。楊逵、張文環が日本語での創作を余儀なくされたのに対し、頼和は日本語教育を受けたが作品では

終始白話文を用いた。彼は新文学運動の役割を「解決しなければならない「現社会の問題を、もっとも重要な問題を」反映する」点に求め（第2節）、「弱者の立場」への共感、「圧迫された台湾人の声を代弁」することが彼の作品の主題となる（第3節）。

第4章はこの特質を「秤」（原題「一桿『稱仔』」、『台湾民報』一九二六・二・一四、二一）に即して分析する。著者は主人公秦得参の「秤」を巡る日本人警官（「査大人」と称され畏れられた）との遣り取りに、当時の台湾農民と総督府支配との関係の象徴を見ている。特に「喜劇的手段」による「悲劇的効果」という表現技法の指摘（第4節）が興味深い。ここでは台湾人の目に映る「査大人」の姿が、白話文学の手法によって「パロディー化」され、「弱者」の立場を転倒するものとなっている。

第5章で取り上げられる楊逵は、三〇年代の新文学成長期を代表する作家である。彼は文学的教養を日本語で身に付けた世代であり、一九二四年渡日、翌年日本大学専門部文学芸術学科夜間部に入学する。新聞配達夫・日雇人夫など苦学生活の中で労働運動に触れ、日本のプロレタリア作家とも知り合うようになる。二〇年代後半は台湾農民運動の中心人物として活動していたが、満洲事変後の弾圧で運動は壊滅状態に陥る。彼の創作活動はその沈滞期を経た後に開始される。著者はその作品に前期の運動体験から継承されたモチーフを指摘し、特に第4節「楊逵文学における土地意識」では「日本の大資本家からのみでなく、台湾の農業人口の大多数を占める雇い農民は、地主の圧迫をも受けていた」という二重の抑圧構造を、楊逵作品が捉えていたと論じる。

第6章は彼の処女作「新聞配達夫」（『文学評論』一九三四・一〇）に関する論考である。この作品は当初『台湾新民報』に前半部分だけが掲載されたが、台湾の製糖業者による農民の土地収奪を描いた後半が発表禁止となり、日本の『文学評論』に投稿した結果高い評価を得、伏字交じりながら全文が掲載された。離散により故郷を失い東京へ出て来た「私」が、新聞屋主人の詐偽紛いの低賃金労働に対して、日本人「田中」「伊藤」らと共にストライキを実行し新聞配達夫達の待遇は改善される。自分達の抵抗手段を見出した「私」は、闘志を抱きながら「一針当れば、悪臭プン〳〵たる」台湾へ帰郷する。著者は「「新聞配達夫」は被圧迫民衆の怒りを狭い個人的なものにせず、民族を越えたインターナショナルな視点から社会問題を提出していた。具体的に言えば、被圧迫の台湾民衆と日本人との関係をどういうふうに扱うかということである」（第3節）と評価する。この論点は「私」の「台湾人に善い人と悪い人があるやうに、日本人もさうだと見える」という日本人観や、「伊藤」の「さあ！　手を握らうぢやないか！　君等を苦しめ、我等を苦しめるものは、同じ種類の人間だ！」という連帯の呼びかけを、当時の日本と台湾の読者がどのように受け止めたかという受容の問題と関連づけて、より展開が望まれる。

第7章、第8章は日中戦争からアジア太平洋戦争に至る戦時下の台湾文学を、張文環の活動を中心に論じる。三〇年代の台湾文

学は郷土文学論争・台湾話文論争など活発な文学論争を通じて、表現手段としての言語の独立を目指していた。しかし一九三七年四月の漢文欄廃止令によって日本語以外の創作発表は禁止される。同年八月頼和・楊逵らによって発刊された中日両用の『台湾新文学』が廃刊。翌三九年一二月には西川満ら在台日本人作家を主導とした『文芸台湾』が創刊。以後、皇民奉公会結成（四一年）、台湾文学報国会（四二年）、陸海軍特別志願兵制度・高砂族陸軍特別志願兵制度（同～四三年）、台湾決戦文学会議（四三年）と、台湾文学は「南進基地」の総動員体制に組み込まれていく。

張文環は四一年『文芸台湾』から離脱し、台湾人作家を主流とした『台湾文学』を創刊、両誌の競合時代を生む。しかし四二年東京・大阪で開催された第一回大東亜文学者大会には西川満・浜田隼雄・龍瑛宗らと台湾代表として参加、また「夜猿」（『台湾文学』一九四二・二）を含む作品により四三年皇民奉公会制定の「台湾文化賞」を受けた。このような振幅の多い彼の活動に対し、著者は「戦時下の張文環は作家として格別反骨的でもなければ、また「御用文人」的でもなかった」（第7章第2節）と一義的な裁断を退ける。そして「民族の立場における郷土台湾と所謂「小人物」の世界こそが張文環文学の重点である。リアリズムと自然主義の技法で、平凡な人物に対する描写を通して、下層階級の苦境が再現されている」（第8章第4節）とその文学の本領を論じる。彼の作品が「皇民化」政策への批判となり得たのは、台湾の人々の生活に肉薄した「リアリズム」によってであった。

以上本書で得た知見をもとに私なりの要約を行なった。ここから分かるように本書の主軸となるのは、台湾文学に内在する「文学的抵抗」という基本姿勢である。その観点は終章で「植民地の性質によって、台湾文学は抵抗の特徴を呈した。この特徴は時代の推移に伴う変化があるが、台湾近代文学の底流に固く存在していると考えている」と再確認される。だが「抵抗」という言葉に伴う硬直した評価基準は避けられる。むしろ本書の特長は、作家により異なる現われ方をした「抵抗」の諸相を、「血涙」「傷痕」「哀傷」というキーワードにより、各自の姿勢に応じて捉えようとしている点にある。著者は論述の過程で作品本文だけでなく、作家の言動や回想、台湾総督府の資料など同時代文献を駆使して、「抵抗」の置かれていた植民地状況との関わりを立体的に復元した。加えて、私達が語学能力の限界から見落として来た台湾・中国での研究成果を踏まえた指摘も貴重である。

その中で最も触発された点を挙げれば、第8章における「皇民文学」評価の箇所である。著者は第4節「軟弱の抵抗」で「治安維持の名のもとに言論弾圧が制度化されていった時代に、文学的抵抗も非常な困難に直面することになる。たとえあっても、軟弱の様相を呈している」として陳火泉「道」（『文芸台湾』一九四三・七）、王昶雄「奔流」（『台湾文学』一九四三・七）の二作について考察する。「道」の主人公は専売局樟脳課に勤める技師であり、同じ「日本人」間に差別はないと考えていたにも関わらず、「内地人」の同僚に昇進を抜かれたことから神経衰弱に陥る。だ

が『皇民への道』を書く過程で、自分の「日本人」観が「本島人的に、考へられた思想」だと気付いた彼は、「国語で思ひ、国語で語り、国語で書く時に於てのみ（中略）国民としての生命の生成発展を希ふことができる」と結論し、陸軍特別志願兵に志願する。当時日本人から高い評価を得たこの作品について、著者は「「一視同仁」の虚偽を見破るところまでいっていながら、やがて、母語を完全に否定し徹底した皇民化への道を歩んだ」と論じ、「皇民文学には台湾人への差別が描かれ、内面の苦悶と挫折が表現されている」点を読み取る。

「道」の主人公は「生れながらの日本人」が「日本精神専売業者」のように振舞うことを批判し、「本島人の中にも、朝鮮人の中にも、はたまた満洲人の中にも、この精神の具有者がある」と主張する。「抵抗」の文学から「皇民文学」への経路を考える時、強要された「日本精神」を逆用する形で、植民地支配下の差別を解消しようという思惑が働いていたことを見落とす訳にはいかない。そこには「内地人が口を開けばすぐ馬鹿ツと怒鳴るといふこと、でなければ口より先に手が動くといふこと」を「日常生活」で絶えず感得させられて来た過去の蓄積があった。著者が「皇民文学に関する評価はさまざまであるが、なんといっても、これを歴史の流れに投げ戻さなければならない」と強調する所以である。しかもその上で、「日本人」化の虚構性が明るみに出される必要があるだろう。「奔流」は「私」がなぜ「日本人」として振舞おうとしたか、その心理的機制を描いている。

私は内地に居た時分を思ひ出した。「御郷里はどちらですか」と訊かれた時に、いかなる心理の作用であらうか。大ていは四国か九州と答へた。なぜ私は言下に「台湾です」と答へるのを憚つたのであらう。だから私はいつも木村文六といふ仮り名を振り翳して行動せねばならなかつた。（中略）そして一かどの内地人に成り済ましたつもりで、得意然と肩をそびやかして喋りまくるのである。たまにはべらぼうめ弁をぬかしては相手を眩惑した。だから郷土訛り丸出しの友人と一緒になつてゐる時は、台湾人だと感づかれはせぬかと、私はひや〳〵せねばならなかつた。そして愈々化けの皮が剥がれる時、私はリスのように逃げまわつた。私はかうして十年の間、絶えず神経を尖らして居たのであつた。

「郷里」を問う側は、暗黙の内に相手を承認できる範囲内で同定しようとする。「私」が怖れたのは、「四国か九州」ではなく「台湾です」と答えた時に生じる現実的な差別ばかりでなく、隔意なく接していた相手が見せる戸惑いや疎隔感をも含んだ反応ではなかっただろうか。〈傷痕〉に向き合うことは、このように他者に対して「内地」という「郷里」への帰属を無意識に強いて来た思想構造そのものを解明することになる。その意味で本書は、読者自身の立場を照らし出す重要な課題を持つ研究である。

（二〇〇三年三月　南京市、東南大学出版社　二三六頁　ISBN 7-81089-224-X）

（くすい・きよふみ　本学大学院博士後期課程）